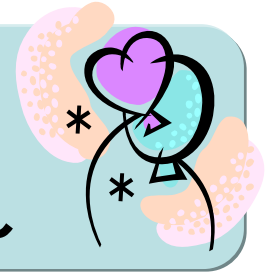


「食」の今を考える連続講座 第1講

報告

「安心」と「安全」のギャップをうめる ～メディアに惑わされない食生活～



日時：2011年11月16日（水） 10:00～12:30

会場：東京都生協連会館 3階

参加者：

主催：東京都生協連消費者行政連絡会



スケジュール

- 10:00 開会挨拶 竹内 誠（東京都生活協同組合連合会専務）
- 10:05 講演 小島 正美氏（毎日新聞記者）
- 11:05 休憩
- 11:15 講演 関澤 純氏（NPO法人食品保健科学情報交流協議会）
- 12:00 質疑応答
- 12:25 閉会挨拶 岡本 琴子（パルシステム東京理事）



小島正美氏

「食品の安全と安心のギャップ」

あふれるメディアの情報をどう読み取るかについてお話したい。

放射能の問題が報道されているが、今あなたにとって何が一番危険かと考えると、それは放射能ではなく普通の感染症や事故が確率としてはずっと高い。報道されることとそれが実際おこる確率との間には開きがある。中国産の製品で事故が2回続いて起こるとそれは報道されてしまい人目を引くが、実際それは何十万分の1位のものではない。ほとんどは違反のないものなのにそれらは報道されずわずかの違反がニュースとなる。

また、事実のみを報道しても不安を煽ることもある。さらに危ないという意見のほうがニュースになりやすい。大丈夫とか良いということはなぜか報道されない。こういったバイアス（偏り）のある記事、情報が多い。その要因は次のことが考えられる。①特ダネ主義 ②警告主義 ③権力主義 ④売らんかな主義 ⑤勉強不足 ⑥わかりやすさの罠 ⑦物質文明、科学技術に否定的 ⑧検察・警察主導 ⑨市民の期待に応える ⑩記事を書く時のリスク思考が過去のまま。リスクは下がっているのに、記者の思考は変わっていない。さらに危ない情報で安心する人がいるということもある。平凡なことは取り上げられず特異性のあることはニュースになる。ニュースだけを見ていると全体像がわからないことが多い。

情報は伝え手の意図するように操作もできる。原発報道などは、危険と言いたい社と大丈夫と言いたい社で論者を分けている。両者の意見を聞いていることはない。また、同じことを言うにもさまざまな言い方をしてそれによって受け取り方が違ってしまふ。危険情報を流すのはメディアの本質的性格と知るべきである。

リスクを考えるときは、客観的な大きさ、他のリスクとの比較、費用効果、リスク対リスクの高低、などをしっかりと見極めることが必要。妙な情報にとびつかず、楽観的に考え、ストレスをためない生き方が大切である。

「安全と安心の関係のギャップを埋める」

リスクコミュニケーションは関係者間の信頼関係を作るもの

消費者と行政・専門家間で食品リスク認識にギャップがあると思う人の割合は増えている。リスクに関する情報と意見の交換であるリスクコミュニケーションは関係者間の理解と信頼向上をもって成功と考える。決して単なる情報提供や情報交換ではない。1「技術的情報の提供」、2「説得と解説」3「関係者の意見を聞き、討論する」の3段階を踏むものであるが、現状は1,2段階が大半で一方的な情報提供や啓蒙を指してしまう。本来は情報ではなく対話の要素が入るものである。

消費者は科学的情報の理解が困難なため、体に良いというおいしい話を信じてしまい、危ないという恐怖を煽る話にのせられる。フードファディズム*の傾向があり、テレビで紹介された食品が売り切れたり科学的有効性と無関係な広告や扇情的な見出しなど広告や宣伝にすぐ影響されてしまう。

食生活の大きな変化が安全性と安心の関係を変化させている。

食生活のあり方についての誤解は、行政や専門家の説明が正確に伝えようとし過ぎてわかりにくくなっているからである。情報や解説は多ければ良いとは限らない。情報公開をしていけば良いとは限らない。科学的に正しいことを伝えれば良いとは限らない。ということであり、知りたい気持ちが起きるには信頼と信用が大切である。そのためには相手との共感と配慮がキーとなってくる。食品の安全について適切な関心と理解を持ち、事実を知ることが大切になる。

汚染には化学物質、微生物、放射性などがある

汚染性質の性質により対処も違う。放射線についてはもともと自然界に在り無くせないので一定程度以下に抑えることが必要で、原発事故でどれだけ追加被曝があるかを考えて危険性を判断する必要がある。食品に含まれている放射線量や地域ごとの放射線量などを理解する。放射性物質の種類により半減期は違うが長いものでも排泄により生物学的半減期は短くなる。決められた暫定基準値は子どものことを考えた基準になっている。

安全と安心は比例していないのが実情で両者はいつも同じと限らず、その間の葛藤と折り合いについて十分な検討が必要となる。安全性は私たちの柔らかな感性・適切な判断で守られる。適切な知識を持ち良識で判断していくことが大切である。

(*健康や病気についての栄養の影響を過大に信じること。)



関澤純氏

<アンケートより>

小島さん講演に関して

☆メディアの報道に惑わされないよう、いろいろな角度から物事を判断できるような賢い消費者にならなければいけないと改めて感じました。

☆メディアの報道というのはあくまで真実の一部であるということ踏まえた上で見ていかなくてはならないことがよくわかりました。

☆報道の立場の方のお話は初めてでしたが良かったです。見極める力を持ちたいと思います。

☆自分も周りもメディアに惑わされていると感じていました。その中でどう自分で考えるか、とても勉強になりました。

関澤さん講演に関して

☆まだまだ日本人は消費者として成熟していないなと思いました。リスクコミュニケーションの重要性を知りました。

☆専門的な話を消費者レベルによくかみくだいてお話していただきよかったです。先生のお話を聞き、必要以上に不安感を持つことはないと思った。

☆リスクコミュニケーションという言葉、考えも初めて知りましたがとても大切なことだと思いました。おおきなメディアもそうですが、例えば一個人の口コミが大きく広がることもあります。個人それぞれがちゃんとした知識を持つことが必要だと思いました。

◎講師小島さんより、アンケートに答える形で再度学習会を行なって議論したいとお言葉がありました。

第4講で組み入れたいと考えています。